

中古文学会 2022 年度秋季大会 開催案内

【重要】 会員のみなさまへ

2022 年度中古文学会秋季大会の開催形態につきまして、新型コロナウイルス感染状況を鑑み、常任委員会において協議した結果、下記のようにすることと致しましたので、お知らせ申し上げます。
ご了承のうえ、ご参加いただきたくお願い申し上げます。

記

- (1) 秋季大会は、現地において対面にて開催することとしますが、会員のうち事前申込をされた方のみが参加できることとします。
- (2) 1 日目に感染対策を施したうえで懇親会を開催します（お弁当等の黙食を含む第一部と懇談を行う第二部の二部制を予定）。参加を希望される場合は、同封の振込票によって事前申込を行ってください（先着 100 名）。懇親会費は、6,000 円です。懇親会の形態については今後の状況によって変更となる場合があります。また、振り込まれた懇親会費は、懇親会が中止となった場合以外は返金できませんのでご了承ください。
- (3) 2 日目の昼食（お弁当）の販売を行います。希望される場合は、同封の振込票によって事前申込を行ってください。昼食代は、1,000 円です。休憩室での飲料等の提供は行いませんので、各自で用意ください。委員会に出席の方は、委員会終了後に昼食をおとりください。
- (4) 現地参加が困難な状況を勘案し、シンポジウム・研究発表等については録画し、大会日程終了後に、事前申込の方に対して視聴できるようにします（事務局が固定カメラによって録画するため、画質・音質等の保証はできません。また、研究発表については録音のみの場合もあります）。視聴後に質問等を行うことはできません。
- (5) 現地参加、録画視聴のいずれの場合も、同封の振込票によって事前申込を行ってください。どちらも大会参加費（資料集代を含む）は 1,000 円です。「資料集」の PDF による配布は行いません。
- (6) 事前申込の方には、現地参加、録画視聴にかかわらず、大会の前（10 月上旬を予定）に「資料集」と「録画視聴の案内」を郵送しますので、現地参加の方は「資料集」を会場に持参していただき、録画視聴の方は、大会日程終了後に「録画視聴の案内」にしたがって視聴してください。事前申込後、現地参加を録画視聴に変更することは自由にできますが、録画視聴を現地参加に変更することはできません。
- (7) 今後の感染拡大状況によっては、大会の全プログラムを遠隔開催とすることもあります。開催形態を変更する場合は、9 月上旬までに学会公式サイトに掲載します。その場合も事前申込の方のみが参加することができることとします。遠隔開催の場合の参加方法は、事前申込の方に「資料集」とともに郵送でお知らせします。事前申込締切後の申込は承ることができませんのでご注意ください。

そのほか、最新情報は学会公式サイトを通じてお知らせします。本件に係る事務局・会場校への個別の問い合わせは、お控えくださるようお願い申し上げます。中古文学会事務局

中古文学会公式サイト <https://chukobungakukai.org/>

大会日程・大会会場

大会日程	10月15日(土) 14:00～ 中古文学会賞受賞式、シンポジウム、懇親会	〈受付〉13:30 開始
	10月16日(日) 09:40～ 研究発表会(午前)、委員会、研究発表会(午後)	〈受付〉09:10 開始
大会会場	山口大学 吉田キャンパス 共通教育別棟 1 番教室 〒753-8511 山口市吉田 1677-1	
懇親会会場	湯田温泉 ホテルニュータナカ 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉 2-6-24 TEL: 083-923-131	

大会参加要領

- 大会参加費
 - 参加費(資料集代を含む): 現地参加、録画視聴いずれも 1,000 円
 - 懇親会: 6,000 円
 - 昼食代(2日目): 1,000 円
 - ※入金済み参加費の自己都合による返金、または他の参加者への付け替えなどには応じられません。
 - ※領収書は、振込受領証に替えることとし、別途発行することはありません。
- 申込方法
 - 同封の振込票による入金をもって申込を承ります。本大会では資料集等の郵送を行う都合上、下記事務局担当研究室の振替口座を使用します。必要事項をご記入のうえ、上記の額をご入金ください(ハガキによる申込は廃止されました)。
 - 加入者名 竹内正彦研究室
 - 口座番号 00200-2-101947
- 申込締切 2022年9月14日(水) ※締切後の申込は承ることはできません。
※締切後の入金は固くお断りいたします。
- 住所・所属等の変更
 - 住所・所属等の変更は、学会公式サイト「会員ページ」をご利用ください。同封の振込票に記載されても、変更は承ることができません。
- 学会費の納入
 - 同封の振込票は【大会参加費専用】です。学会費は納入できません。また、大会会場での学会費納入は受け付けません。
- 出張依頼状
 - 氏名・職名・提出先(所属長名)を明記のうえ、ポータルデスクへメールでお申し込みください。
- 会場について
 - キャンパス内は禁煙です。
 - 駐車場は無料です。タクシーのご利用をお勧めいたします。
- 宿泊について
 - 湯田温泉エリアが便利です。各自で早めにご予約ください。
- 交流広場(フリースペース)
 - 以下の要領で交流広場を開設します。研究者相互の交流・情報交換の場としてご活用ください。
 - 用途: 博士論文要旨・論文抜刷・研究プロジェクト報告書等の展示や配布、

研究会・学会等の紹介、会誌等の展示や配布・販売など。

資格：本学会員に限る。団体の場合は、本学会員が代表者であること。

申込：氏名（団体の場合は団体名および代表者名）・連絡先の住所・電話番号・メールアドレス・展示物等の内容について、9月14日（水）までに大会準備室へメールでお申し込みください。

注意：スペースに限りがあるため、申込先着順で受け付けます。

広場には、机と椅子を用意します。それ以外の対応はしません。

当日は、受付で利用手続きをしてください。

交流広場は大会開催中開場します。利用時間は任意です。出品物の持ち込みは各自で行い、終了後はすべて持ち帰ってください。

10. 臨時託児室 ・本大会では臨時託児室は開設しません。

11. 問い合わせ先 ・大会全般に関すること

中古文学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學若木タワー1012（竹内正彦）研究室内

E-mail：info@chukobungakukai.org

・参加申込、参加費納入、出張依頼状に関すること

中古文学会ポータルデスク

〒111-0041 東京都台東区元浅草 2-10-11 吉延ビル 4F 株式会社新典社内

E-mail：info@chukobungakukai.org

・会場、交流広場に関すること

中古文学会 2022 年度秋季大会準備室

〒753-8511 山口市吉田 1677-1

山口大学 人文学部 森野正弘研究室内

E-mail：morino@yamaguchi-u.ac.jp

*問い合わせにはできるかぎりメールをご利用ください。

大会プログラム

第1日 10月15日(土)

13:30	受付開始	
14:00-14:05	開会の辞	山口大学人文学部長 脇條 靖弘
14:05-14:20	第15回中古文学会賞授賞式	
14:20-17:15	シンポジウム「日記文学研究の現在」	
	趣意説明	山口大学 森野 正弘
	基調報告①「日記文学の始発—『蜻蛉日記』を中心に—」	徳島大学 堤 和博
	基調報告②「日記文学とは何か—『和泉式部日記』の会話文から—」	明治大学 中村 成里
	基調報告③「日記文学研究の可能性—『紫式部日記』『更級日記』を中心に—」	早稲田大学 福家 俊幸
	……休憩(15:45-16:15)……	
	討議	〈司会〉山口大学 森野 正弘
18:30-20:30	懇親会(湯田温泉 ホテルニュータナカ)	

第2日 10月16日(日)

09:10	受付開始	
09:40-11:00	研究発表会(午前)	
	『紫式部日記』にみられる紫式部と物語の関係	山口大学〔院〕 三浦 航季
	『和泉式部日記』諸本論の一視点—〈応永異文〉をめぐって—	國學院大學北海道短期大学部 渡辺 開紀
	……休憩(11:00-12:40)・委員会(11:10-11:40)……	
12:40-15:00	研究発表会(午後)	
	侍女の立場で行われる「後見」について	東京女子大学〔院〕 大槻 栞
	背後から寄る雲居雁—「母」・「主婦」なるものをめぐって—	國學院大學栃木短期大学 津島 昭宏
	……休憩(14:00-14:20)……	
	『栄花物語』における為平親王の造型—「式部卿宮」の呼称を中心に—	東京大学〔院〕 塚崎 夏子
15:00-15:10	閉会の辞	中古文学会代表委員 竹内 正彦

メイン会場：共通教育別棟1番教室

休憩室：共通教育別棟2番教室

交流広場：共通教育講義棟2階15番教室

書籍販売：共通教育講義棟2階26番教室

委員会：メディア講義棟メディア講義室

趣意説明

山口大学 森野 正弘

基調報告①「日記文学の始発—『蜻蛉日記』を中心に—」

徳島大学 堤 和博

基調報告②「日記文学とは何か—『和泉式部日記』の会話文から—」

明治大学 中村 成里

基調報告③「日記文学研究の可能性—『紫式部日記』『更級日記』を中心に—」

早稲田大学 福家 俊幸

討議

〈司会〉山口大学 森野 正弘

〔趣意〕

従来、事実の記録としてある日記と決別することで日記文学は誕生したという見取り図が示されてきた。だが、文学として位置づけたことで、今度は物語や私家集との違いをどう説明するかという問題を抱えることになる。日記文学に位置づけられた作品の中には歌物語や私家集との径庭がそれほどないものもあって、一概に定義づけるのは容易でない。それでも、自照性や〈語り〉などの観点から日記文学の特性を見定めようとする試みが行われてきた。

日記と決別したとは言え、日記文学の基底にあるのは記録である。主家讃美の記録という「女房日記」としての痕跡は『紫式部日記』の随所に見出されるし、『蜻蛉日記』にしても、兼家とのつながりを記録するために書かれたとする説が提出されている。〈記録〉という行為をあらためて考えてみる必要があるであろう。また、物語との違いはどうか。物語の〈語り手〉に対し、日記では記主である〈書き手〉が現前化してくるという指摘がある。この指摘は日記文学にも適用されよう。但し、その〈書き手〉の存在については、個人の内面に依拠するものか、あるいは集団との関係性の中で規定されるものかなど、さらに考えるべき点は多い。

日記を文学として捉える視点は確かに様々な意味を惹起し、私たちに可能性を与えてくれるであろう。だが、その可能性は、ともすると日記と他の文学テキストとの違いを曖昧にしかねないものでもある。果たして日記文学に固有の解釈コードはあり得るのか。本シンポジウムでは、「日記文学とは何か」という根源的な問いを見据えつつ、〈記録〉〈書き手〉といった問題について論議してみたい。この試みはおそらく、物語や私家集といった他のジャンルのテキストとの関係を見つめ直す契機になるであろう。それはまた、中古文学という枠組みを再認識する機会にもなると思われる。

〔文責：森野 正弘〕

〔基調報告①〕

日記文学の始発—『蜻蛉日記』を中心に—

徳島大学 堤 和博

本格的な日記文学の始発を考えたい。日記文学の基底に記録があるとみると、本格的な日記文学が受領層の娘であった道綱母から始発したきっかけは、撰閑家の様相を記録するところにあつたとみなされる。でも『蜻蛉日記』は道綱母の内面が刻まれた紛れもない文学作品であり、やはり記録からの決別が見られる。すると、道綱母のような境遇の人間が斯かる作品を書き始めたのがやはり不可解だ。文学史におけるこの問題は、古くから考察されているが、一連の小考を踏まえての私なりの答を導きたい。

〔基調報告②〕

日記文学とは何か—『和泉式部日記』の会話文から—

明治大学 中村 成里

平安時代の日記文学は、「記」としての性格を有しつつ、私家集に連なる発想のもとで表現方法を開拓していったとみられる。また、日記文学の特徴は、書き手が登場人物の発言を会話文をもって記録したことにある。それは、登場人物を現実的な存在として読者に想起させる行為に等しい。たとえば『蜻蛉日記』の藤原兼家やその姉妹である登子、『紫式部日記』の藤原道長、『和泉式部日記』の敦道親王の発言などは顕著な例である。本報告では、近年の研究成果を踏まえ『和泉式部日記』の会話文を主軸として、日記文学とは何か考察を試みたい。

〔基調報告③〕

日記文学研究の可能性—『紫式部日記』『更級日記』を中心に—

早稲田大学 福家 俊幸

近代以降、記録としてとらえられてきた平安時代の仮名日記は、作者の内面を写しとった文学作品として読まれることで日記文学となった。しかし、その内面を重視する志向は、作者を必要以上に絶対的存在に押し上げ、その分、仮名日記を閉じられた世界と見なした面もあったように思われる。仮名日記を読む者は、作者固有の思念のみならず、帰属する集団や享受者たちとの間で交換され共有されることばや文化、歴史など、開かれた世界にも目を向けるべきであろう。すでにこのような立場からの優れた見解も重ねられているが、私なりにささやかな報告を行いたい。

〔研究発表①〕

『紫式部日記』にみられる紫式部と物語の関係

山口大学〔院〕 三浦 航季

『紫式部日記』の中には『源氏物語』について言及している箇所が散見する。これによって私たちは『源氏物語』の作者が紫式部であると理解するわけであるが、日記中に記される『源氏物語』と紫式部の関係は、〈作者／作品〉という指標で測る以上に開きがあると言わざるを得ない。「源氏の物語」という書名が示されるのは僅か二例に留まり、里居の記事では、物語を読んでみても「見しやうにもおぼえず、あさまし」としか感じられない式部が描かれる。あたかも『源氏物語』は、作者である紫式部の手を離れて独り歩きしているかのようである。同種の指摘は廣田收氏にもあり、「御冊子」という敬体表現に着目すれば、この物語が「他ならぬ中宮彰子の産み出したものとして顕彰され」ていることが分かるという。

従来、紫式部が『源氏物語』に言及したことについては、屈折した学才矜持の表れであるとか、物語の地位向上のためである等と解されてきた。「男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」という父の言説も、一般的には学才矜持と捉えられている。しかし、婉曲的とはいえ学才矜持を記すというのは、紫式部の自認する消極的な「心ばせ」に抵触する行為ではないのか。父の言説を記したことの意味を、あらためて問い直したい。本発表では、紫式部と『源氏物語』の関係を辿りつつ、その微妙な距離感の深奥に父の言説があった可能性について考察し、併せて紫式部の自己意識との関連を探りたい。

〔研究発表②〕

『和泉式部日記』諸本論の一視点—〈応永異文〉をめぐって—

國學院大學北海道短期大学部 渡辺 開紀

『和泉式部日記』の現存諸本は四系統に分けられ、諸本間には相当数の校異が知られる。そのうち、当発表では『和泉式部日記』十二月記事内の長大な本文異同を取り上げる。

本作品の善本とされる三条西家本などには、いわゆる宮邸入り直後に、帥宮が「ここには近ければゆかしげなし」と発話し、「女」が「それをなん思ひ給ふる」と応対する場面がある。一方、応永本をはじめとする多くの諸本は、同場面に「おろしこめてみそかにきけはひるは人々院の殿上人などまいりあつまりていかにそかくてはありぬへしやちかおとりいかにせんとおもふこそくるしけれとのたまはずれば」との八十字弱の異文を有する。副題〈応永異文〉は、上記の異文の仮称である。

〈応永異文〉の存在は「系統論」「本文校訂」と深くかかわる。「系統論」からは、三条西家本に目移りによる誤脱を認めるべきとの見解が出されている。ただ注釈上の「本文校訂」に〈応永異文〉を補うか否かの判断は分かれる。注を施す本文が一致しない以上、議論がかみ合わず、帥宮の発言にも、「女」の返答にも、解釈上の定見がないものと思われる。そこで〈応永異文〉の諸問題を一度精査したい。

近年、本作品に限らず、性急な本文校訂や、逆に特定の伝本を過大視することへの警鐘的提言

が多くなされてきた。そうした提言を重く受け止め、〈応永異文〉の現在地を見定めてみる。その中で〈応永異文〉読解の端緒を開きたい。

〔研究発表③〕

侍女の立場で行われる「後見」について

東京女子大学〔院〕 大槻 葉

平安朝の物語文学における侍女、あるいは侍女的立場の人物によって行われた「後見（うしろみ）」について考察する。一般的に親兄弟や父と后などで結ぶ「後見」とは血縁関係（姻戚を含む）を前提としたものであるが、侍女による「後見」は血縁関係が認められないものが含まれる点、両者の身分が大きく離れている点が特徴である。

侍女による「後見」の例を見ると、『源氏物語』の女三の宮の「後見」について、「この御後見どもの中に、重々しき御乳母」とあり、「この御後見ども」の「中」からまず御乳母が挙げられることから、「後見」を行う侍女はすなわち乳母であるという意識が窺える。主人に付き従う存在でありながら、本来血縁者が担う「後見」を重要な職掌とする点で、乳母は侍女（従者）のなかでも特別な存在であると言えよう。しかしながら「後見」が乳母の別称であるかということ、明石君や宇治十帖の弁の君、あるいは『夜の寝覚』の対の君などが、作中人物や平安朝の読者に乳母として受け止められていたとは考えがたい。「御乳母ども」「御後見ども」と総称され、養君の「後見」である乳母と、個別に「後見」と言及される侍女との違いはどこにあるのか。血縁者でもないのに「後見」関係を結び得る「乳母」という侍女のあり方の特別性に留意しつつ、「後見」であると言及される侍女の独自性、侍女がわざわざ「後見」と言及されることの意味について考察する。

〔研究発表④〕

背後から寄る雲居雁—「母」・「主婦」なるものをめぐって—

國學院大學栃木短期大学 津島 昭宏

落葉の宮に思いを寄せる夕霧に対して雲居雁は嫉妬する。とりわけ、夕霧のもとに届いた一条御息所の手紙を奪い取る場所は、「国宝源氏物語絵巻」にも取り上げられており、よく知られたところだ。「這ひ寄りて、御背後より取りたまうつ」（夕霧巻）とあるが、ここについては、「単調な夫婦生活、子沢山な日常生活になれて、優雅な身だしなみを忘れてる」などと注が施されている。雲居雁を「平凡な主婦」と位置づけたり、彼女の嫉妬を「家庭喜劇的」な夫婦喧嘩のそれ、などと論じるものがあるが、この場面の理解もそれらと方向性は同じだろう。だが、果たしてそれでよいか。

そもそも、人物の背後からものを奪うというのは普通ではない。死角にあたる「背」や「うしろ」は、とかく靈的なものと結びつきやすい。この点をまず押さえておく必要がある。つまり、雲居雁が手紙を奪い取る場面は、ある種のおぞましさを描いたものではなかったか。そうした意味において、「いと鬼しうはべるさがなものを」と、夕霧が悪口を言うのは、彼女の存在をみごとに射抜いている。

筒井筒の物語を踏まえた幼き時の恋は、困難を経たのち、めでたく母となることで成就する、そ

のような雲居雁の捉え方を再考したい。子沢山だからとて、「母」だ「主婦」だと烙印を押してきたわれわれ読者の問題についても合わせて考えたいと思う。

〔研究発表⑤〕

『栄花物語』における為平親王の造型—「式部卿宮」の呼称を中心に—

東京大学〔院〕 塚崎 夏子

『栄花物語』の為平親王関連記事には史実との相違が目立つ。為平親王式部卿任官記事もその一例で、前任者の重明親王薨去を受け「一品式部卿宮」になったとされ、以降「式部卿宮」と呼ばれるが、現実の任官時期は安和の変より後である。また、史上の式部卿任官者は、重明親王から為平親王までの間に少なくとも二人の親王がいる。しかし、これは単なる事実誤認でなく、『栄花物語』による呼称を利用した人物造型の方法ではないか。

史実では、最上席の皇族とみられる年配の親王が式部卿に着任し、大多数が天皇や東宮になれぬまま、在職で薨去している。先行物語でも特に『源氏物語』では、皇位継承権を持つ重鎮たる朝顔齋院の父親王、紫の上の父親王、明石中宮腹の第二皇子らが式部卿になるが、彼らが物語中で立坊することはない。つまり、実際の任官よりも遥かに早い段階で為平親王に「式部卿宮」の呼称を用いるのは、「式部卿宮」の「帝位に即けなかった皇子」としての側面を読者に想起させ、立坊が実現しない未来を示唆している可能性がある。

従来、為平親王の一連の物語は、皇位継承の資質を持つ皇子が外祖父・母後の早世により後見を失い、不当にも東宮候補から凋落していくように読まれていた。だが実は、『栄花物語』は為平親王を当初から「立坊し得ない皇子」として造型していたのであり、これは史実を物語に落とし込むために『栄花物語』が切り拓いた独自の叙述方法だと言えよう。

交通アクセス

○飛行機をご利用の場合

山口宇部空港→空港連絡バスで新山口駅→〔JR 山口線〕→湯田温泉駅→山口大学
※新山口駅から山口大学までは車で約 30 分。

○新幹線をご利用の場合

新山口駅→〔JR 山口線〕→湯田温泉駅→〔JR バス、防長バス等〕→山口大学
※新山口駅から山口大学までは車で約 30 分。

【参考】第 1 日目（10 月 15 日（土））当日に東京から新幹線をご利用の場合のモデル例

①東京駅→新山口駅：新幹線のぞみ号

6:15 発⇒10:33 着（のぞみ 3 号）

7:51 発⇒12:16 着（のぞみ 13 号）

※8:30 発⇒12:54 着（のぞみ 17 号）→②※へ

9:30 発⇒13:54 着（のぞみ 21 号）

②新山口駅→湯田温泉駅：JR 山口線

11:14 発⇒11:34 着

12:12 発⇒12:32 着

13:01 発⇒13:10 着（特急：指定席 1280 円）

※13:12 発⇒13:32 着→③※へ

13:52 発⇒14:13 着

③湯田温泉駅入口→山口大学：JR バス、防長バス

（湯田温泉駅からバス停「湯田温泉駅入口」まで徒歩 5 分）

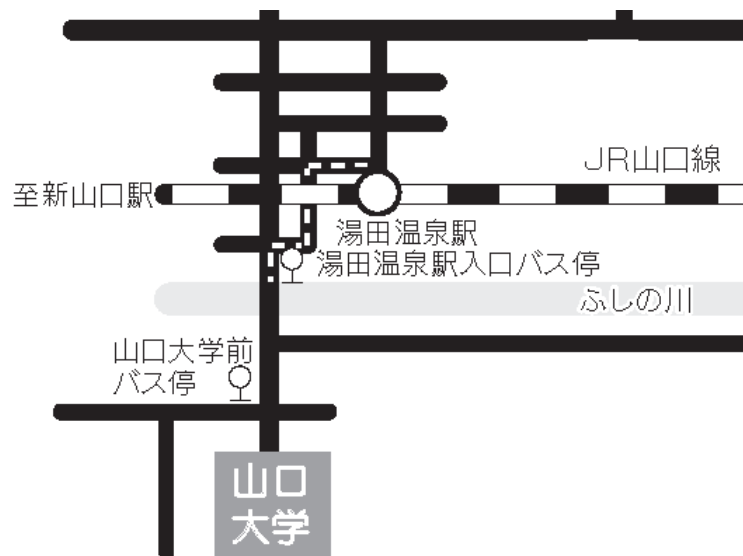
11:45 発⇒11:52 着（JR バス）

11:52 発⇒11:56 着（防長バス）

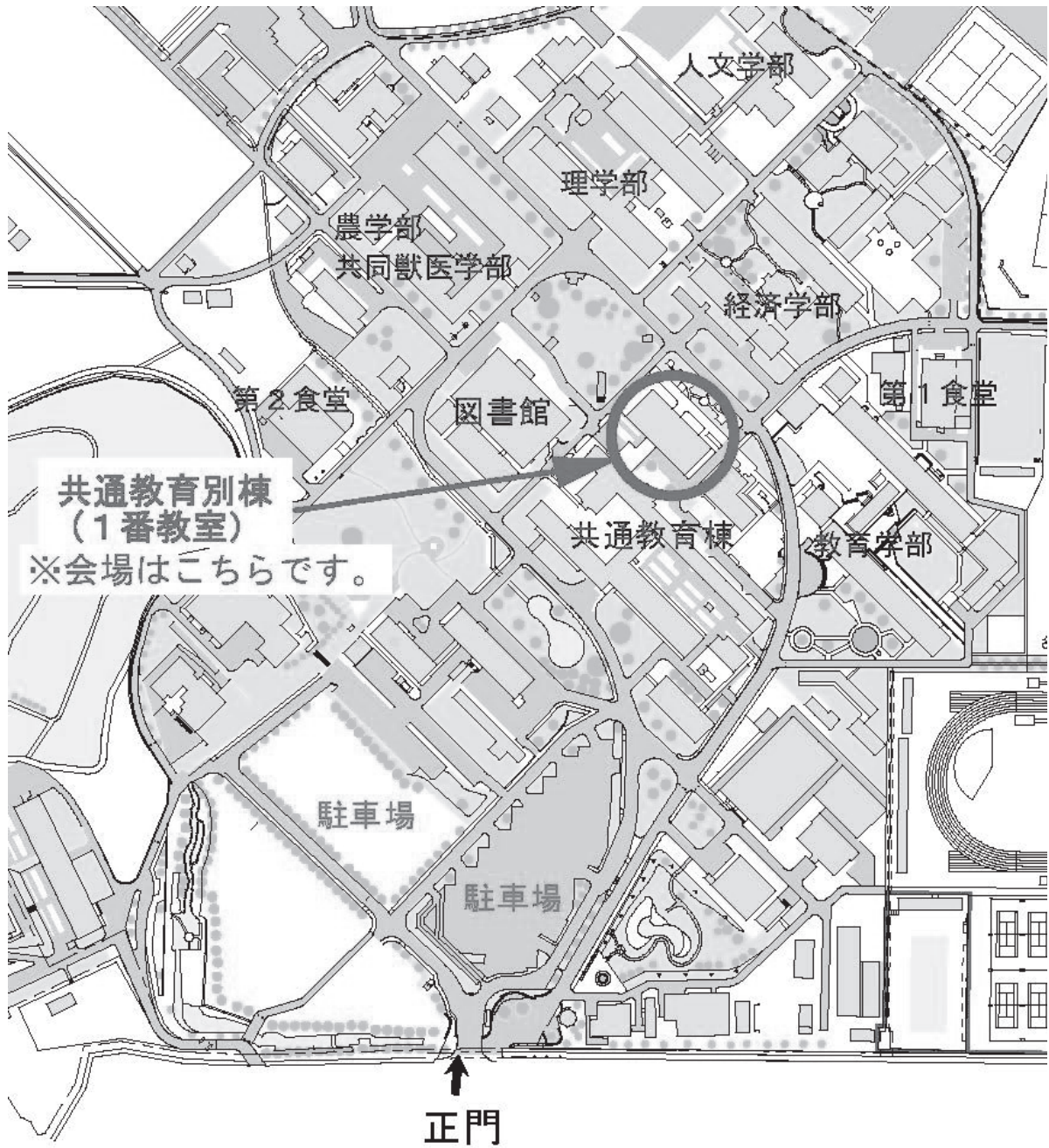
12:45 発⇒12:54 着（JR バス）

12:57 発⇒13:01 着（防長バス）

※13:44 発⇒13:53 着（JR バス）



山口大学構内図



会場周辺図

